

【報告】

なすかしの森セカンドスクールが参加児童に及ぼす効果と指導方法の検討 —レジリエンスの変容に着目して—

Examination of effect and teaching methods in
“Nasukashi no mori second school” on participation children
—By paying attention to the transformation of resilience—

湯川 枢 YUKAWA Hajime
国立那須甲子青少年自然の家

志賀 亮太 SHIGA Ryota
国立那須甲子青少年自然の家

要旨

本研究は、国立那須甲子青少年自然の家が平成 26 年度に実施した、長期宿泊体験活動「なすかしの森セカンドスクール」において、参加児童のレジリエンスにどのような変容が起こるかを明らかにし、今後のセカンドスクールの運用の一助となるよう、指導モデルを作成することを目的とする。

小学生版レジリエンスの尺度を用いた質問紙調査及び参与観察を行った結果、参加児童に有意な影響を及ぼすことが確認された。このことは参加児童の自主性を尊重したプログラム「なすかしの森タイム」が大きく影響したと考えられる。なお、参加児童への指導は「教員の不在」、「児童の自主性」、「心身の安全」の3点を念頭に置いた、参加児童の隠れたやる気を汲み取るための、寄り添いや声掛け、励ましが大切である。

キーワード

長期宿泊体験活動、小学生、レジリエンス、生きる力

I. 諸言

平成8年文部省中央教育審議会第一次答申にて「生きる力」が明記されてから、近年ではますます「生きる力」の重要性が高まっている。平成20年1月の中央教育審議会答申を受け、小学校では一定期間（例えば1週間（5日間））程度の長期宿泊体験活動を通して学ばせることが望ましいことが示された。また、平成23年度から完全実施となった小学校学習指導要領により、長期集団宿泊活動が推奨されている。

これらの社会的な要求に応えるため、国立那須甲子青少年自然の家では、平成19年度から学校生活と家庭生活の場を当施設に移しながら過ごす、長期宿泊体験活動「なすかしの森セカンドスクール」（以下、「セカンドスクール」という。）を実施している。セカンドスクール参加校は年々増加しており、平成26年度は6つの小学校が参加した。

この事業は、学校ではできない教科学習や総合的な学習、特別活動などを体験的に学びながら、基本的な人間関係や生活力の向上を図ることを目的とし、過去の調査では参加児

童の「生きる力」に有意な向上がみられることが分かっている。しかしながら、「生きる力」の向上については年度ごとまたは因子ごとに大きな差があり、セカンドスクールをより良いものとしていくための検討材料としては十分なものではない。

そこで本研究では、この「生きる力」に関連し、近年、「レジリエンス」という概念が注目されていることに着目した。レジリエンスとは、もともとは物理学の概念であり、物体の弾力性や柔軟性という意味を持つ。また、船が傾いた時に元に戻る復元力という意味でも使用されている。この概念が教育現場でも紹介されるようになってきており、ストレスなどによる精神的なダメージから立ち直ることのできる個人の特性及び能力、スキル、プロセスという意味で使用されている。また、原らによれば、レジリエンスとは「困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果」と定義され、日本語では「回復力、弾力性」と訳されており、生きる力との関連からもレジリエンス育成の必要性が求められている¹⁾。

また、欧米のレジリエンス研究を概観すると、大きく「スキル重視型」、「体験重視型」、「環境整備型」の3つに分類されている。この中でも特に、「体験重視型」は長期的な効果を期待して実施されており、疑似体験ではない様々な体験の中で学ぶことによりレジリエンスを育成することができるものとされている²⁾。

以上のことにより、レジリエンスと生きる力の関連性からも、日常と異なる環境の中での様々な体験による参加児童のレジリエンスの変容はセカンドスクールの効果の検討において非常に興味深いものであると考えられる。

セカンドスクールは「生きる力」の向上のための指導に、重点を置いている。セカンドスクールをより良くするための検討材料として、本研究ではさらなる効果を検証するため、レジリエンスを活用することを試みた。その結果を報告する。

Ⅱ. 目的

本研究は、セカンドスクールにおいて、参加児童のレジリエンスにどのような変容が起こるかを明らかにし、結果について考察することにより今後のセカンドスクールの運営の一助とすることを目的とする。詳細は次の通りである。

- ①参加児童のレジリエンスに注目し、セカンドスクール前、セカンドスクール後の変化とともに参与観察を用いた調査を行い、セカンドスクール中の参加児童の変容を明らかにする。
- ②①の検証の結果をもとに、セカンドスクールの指導モデルを作成する。

Ⅲ. 事業概要

セカンドスクールでは、国立那須甲子青少年自然の家でしかできない総合的な学習をさせるため、実際に見て、手で触れて、肌で感じるプログラムを設けている。

長期集団宿泊活動の必要性が問われる中、一方で保護者や小学校からのニーズとしては、学力の向上が求められている。そこで国立那須甲子青少年自然の家としては、教育委員会や小学校と連携し、自然体験活動や集団生活を通して確かな学力の向上を図り、仲間と助け合って生活する喜びを味わってもらうことをセカンドスクールの目的としている。

セカンドスクールの大きな特徴は、教員が自然の家に定時に出勤し、定時に退勤するこ

とである。教員が参加児童を教育する時間を「スクールタイム」と呼び、広大なフィールドや自然の家の研修室にて各教科の授業及び体験活動、または自然観察等の授業を実施する。「スクールタイム」が終わると「なすかしの森タイム」という放課後タイムが始まる。この時間からは基本的に教員は参加児童と関わらず、自然の家の職員と大学生中心の教育支援スタッフが生活指導にあたる。

「なすかしの森タイム」は、参加児童の自主性を重視し、集団生活を通して自立を図る機会としている。具体的な活動としては、宿題や衣類の整理整頓や洗濯、食事、入浴、清掃、朝夕のつどいなどがある。そして参加児童と教育支援スタッフが協力して企画実施するキャンプファイヤー、ナイトハイクなどがある。

また、「なすかしの森タイム」では上記のプログラム以外に教育支援スタッフの指導のもと、参加児童がセカンドスクールの生活を振り返る時間を毎日1時間程度設けている。この時間は宿泊室に参加児童と教育支援スタッフが集まり、一人ひとりが反省点を発表し合い、それらの反省点を文章化するなどし、落ち着いて自らを見つめ直す時間である。これは、参加児童が自分の成長を確かめ、これからの生活に生かせるようにさせるためである。

セカンドスクールでの参加児童への指導は、教員、教育支援スタッフ、自然の家の職員がそれぞれ役割分担をしながら行っている（図1参照）。「スクールタイム」では、教員が学習指導し、教育支援スタッフは間接的に学習を支援する。一方「なすかしの森タイム」では、教育支援スタッフが生活指導を担う。なお、教育支援スタッフは、大学で教員養成または、社会教育等を専攻する学生が主であるため指導方法も万全とは言い難い。そのため、自然の家の職員が指導や助言、ケアを適宜行っている。このことから分かるように、主役はあくまで参加児童と教育支援スタッフの成長を目的とし、自然の家の職員は裏方に回るような運営体制をとっている。

セカンドスクールの主な1日の流れは以下の通り（図2参照）。

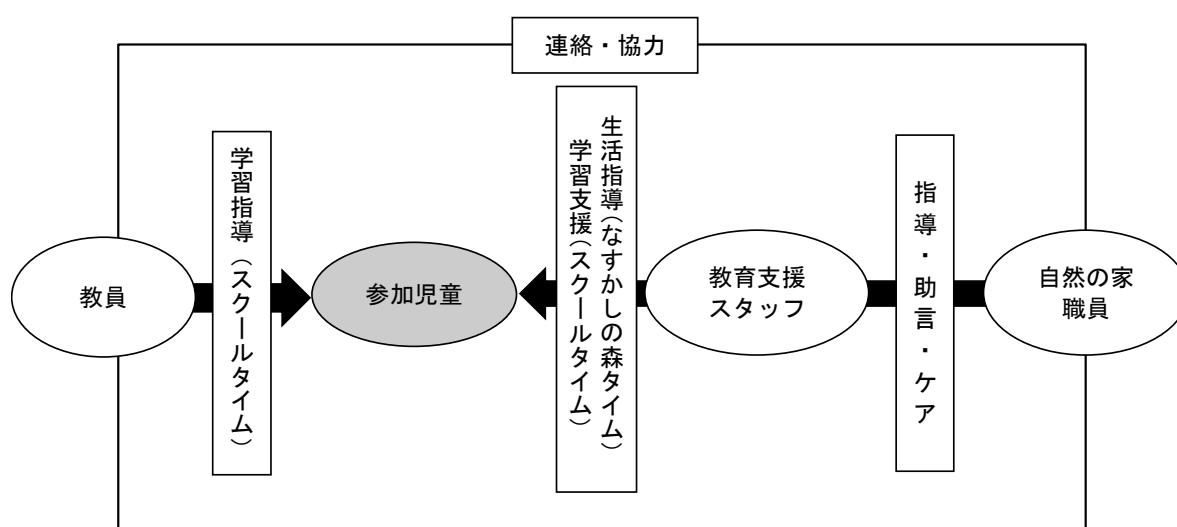


図1 運営体制

時間	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
	起床	登校準備・清掃	朝のつどい	朝食	朝の会	スクールタイム		昼食	スクールタイム	帰りの会	なすかしの森タイム		タベのつどい	夕食	なすかしの森タイム	振返り・入浴	就寝

図2 セカンドスクールの1日の流れ

表1 調査対象の内訳

実施期間	実施校	男性	女性	合計
平成26年	N村立H小学校	6	6	12
11月17日～21日	N村立K小学校	26	26	52
				64

IV. 方法

1. 調査対象

国立那須甲子青少年自然の家が平成26年度に主催したセカンドスクール参加校6校の小学校の内、2つの小学校の参加児童64名を調査対象とした（表1参照）。

2. 調査及び分析方法

（1）質問紙調査

田中が開発した小学生版のレジリエンス尺度を用いた調査を実施した。

小学生版のレジリエンス尺度は、田中が石毛らや高辻による先行研究と予備調査をもとに信頼性、妥当性を持つ尺度として作成したものである³⁾。この小学生版のレジリエンス尺度は、「楽観性」、「挑戦性」、「内面共有性」、「積極的活動性」という4因子からなり、23項目で構成されている（23項目中4項目はチェック項目）（表2参照）。

参加児童へ質問項目の23項目を5段階評価で回答を求め、評価はそれぞれ「とてもそう思う」（5点）、「少しそう思う」（4点）、「どちらとも言えない」（3点）、「あまりそう思わない」（2点）、「全くそう思わない」（1点）とし、セカンドスクール前（以下、Pre）とセカンドスクール後（以下、Post）の計2回実施した。分析については、Js-STAR 2012を使用し、一要因参加者内における分散分析を行った。なお、有意水準は5%未満とした。

表2 レジリエンス尺度の因子と項目

因子	項目
楽観性	1. 困った時、考えるだけ考えたらもう悩まない
	2. いやなことでも、時間がたてば自然に忘れることができる
	3. いやなことがあった時でも、くよくよしない
	4. 何事もよい方向に考える
	5. 自分の間違いやルール違反を友達から注意された時、そのことを認めて行動を正しく直すことができる
	6. 困ったことが起きても、よい方向に考えるようにしている
挑戦性	7. 失敗してもあきらめずにもう一度挑戦する
	8. やり始めたことは最後までやり通す
	9. 苦手なことでも失敗を恐れずに取り組む
	10. 決めたら必ず実行する
	11. 自分に自信がある
内面共有性	12. つらい時は自分の気持ちを誰かに聞いてもらいたいと思う
	13. 悲しい時は自分の気持ちを誰かに聞いてもらいたいと思う
	14. 考えを人に聞いてもらいたいと思う
積極的活動性	15. 新しい友達や先生に積極的に話しかけることができる
	16. 新しい行事や仕事にすぐなれる方だ
	17. 自分は学校で元気に活動していると思う
	18. 何かしようと思った時、色々な方法を考える
	19. 困った時、友達に助けてほしいとお願いできる
チェック項目	1. 友達から嫌なことを言われても気にしない 2. 落ち込んだままでないで、次にできることを考える 3. 困った時でも、できそうなことからまず始めてみる 4. 友達が困っている時は進んでなぐさめてあげる

(2) 参与観察

参加児童と行動を共にする筆者を観察者とした参与観察を行い、レジリエンスという概念に即した具体的な場面をフィールドノートに記録した。この参与観察は、質問紙の数値では明らかにできない具体的な場面を収集することを目的としている。

V. 結果

1. 質問紙調査による結果

前述の一要因参加者内における分散分析の結果を表3に示した。結果、合計得点 ($F=15.86$, $p<.01$) において有意な変容が得られた。また、それぞれの下位因子得点は、「楽観性」($F=4.20$, $p<.05$)、「挑戦性」($F=4.81$, $p<.05$)、「内面共有性」($F=4.51$, $p<.05$)、「積極的活動性」($F=30.47$, $p<.01$) となっており、すべての下位因子で有意な変容が見られた。

2. 参与観察による事例

質問紙調査では明らかにできない参加児童の変容を明らかにするため、参与観察を実施した。その事例を下記に紹介する。

(1) 【N 村立 H 小学校 E さん】

スクールタイムの算数の授業などの解答を求められる場面では積極的に挙手し発表をしていた。しかし、初日の「なすかしの森タイム」での話し合いでは全く発言をしなかった。これらの様子から、E さんの中で答えのあることを述べることに、自分の考えを述べることに同じ発言でも大きな差があるように感じた。

表3 レジリエンス尺度の合計得点及び各因子得点の平均値と標準偏差及び分析結果

	Pre	(SD)	Post	(SD)	F
合計得点	88.65	14.29	92.71	15.15	15.86 **
楽観性	22.93	04.32	23.68	04.70	04.20 *
挑戦性	19.32	03.52	20.06	03.58	04.81 *
内面共有性	11.04	02.89	11.64	03.08	04.51 *
積極的活動性	19.53	03.28	21.10	03.19	30.47**
				*p<.05	**p<.01

そんな中、3日目の「なすかしの森タイム」で翌日のキャンプファイヤーの「火の子」の選出があったが、いつも積極的に発言するメンバーが多数立候補し、Eさんは立候補しなかった。これらの状況を見た教育支援スタッフから、立候補したメンバーを非難するのではなく、その他の参加児童への問い掛けとして、「セカンドスクールでできるキャンプファイヤーはこの1回だけ。このメンバーでいいのかな？少しでもやりたいと思っている人がこの中にいるならもう少し話し合った方がいいと思う。」という発言をした。するとEさんが迷いながらも立候補する姿が見られた。Eさんにとってこの状況で立候補することは簡単なことではなかったように思う。困難な状況とまでは言い難いが、Eさんがそれまでの現状を乗り越えた場面であった。

(2) 【N村立K小学校2組】

初日の「なすかしの森タイム」では、意見が通らないと泣き出す児童の姿、言い争いになる児童の姿が多く見られた。しかし3日目の「なすかしの森タイム」では、翌日のレクリエーションについて話し合う場面において児童に変化が見られた。最初は自分から提案することができなかった児童が役割を持つことで、「〇〇という考えもあります。」や「その意見に賛成です。」など、自分の意見を言えるようになった。また、相手の意見も聞き、自分の意見を言える児童の姿が見られた。初日に比べて少しではあるが、自己肯定感や責任感が出てきた様子を見て、担任の先生からは「遠慮しがちで、自分の意見を言える子ではなかった。」「すぐに泣いて、話し合いにならなくなっていたのに。」という言葉もあった。全てにおいて自分たちで決めなければならないという状況に、クラス全員が協力する姿勢に変化してきたと考えられる。最終日が近づくにつれ、クラス全体の協力的な姿が見られた。

VI. 考察

1. レジリエンス全体の変容について

本研究で、セカンドスクール中の参加児童のレジリエンスの変容に及ぼす効果を検証した結果、前述した通り、質問紙調査では合計得点において有意な結果が得られた。

セカンドスクール中に参加児童のレジリエンスが向上した大きな要因として、「なすかしの森タイム」が挙げられる。「なすかしの森タイム」では教員が不在であり、さらに自然の家の職員はサブスタッフとして支援に回る。したがって、参加児童と大学生中心の教育支援スタッフが協力し合い、主体的にプログラムを計画し、実施していくようになる。こ

れは、指導者から指示されたことだけを実行するのではなく、参加児童自身が物事を決めていかなければならないからである。

また、参与観察の事例（２）では、初日において、意見が通らないと泣き出す児童や、言い争いになる姿が見られたが、３日目には相手に意見を聞いてもらいたいと思う姿が見られ、「内面共有性」の向上も伺える。

以上のことから、「なすかしの森タイム」がレジリエンスの向上に有意な影響を与えたと考えられる。

２．積極的活動性の変容について

特に注目したいのが、「積極的活動性」の有意差がはっきり表れている点である。なお、このことは参与観察の事例からも分かる通り、日を追うごとに参加児童の「積極的活動性」が向上している。

前述したように、石毛らは中学生、高辻は幼児を対象としたレジリエンスの研究を行っており、これらの研究をもとに田中が小学生版のレジリエンス尺度を開発した。中学生や幼児と小学生版レジリエンス尺度の異なる点は、「挑戦性」と「積極的活動性」の因子である。

田中によれば、「挑戦性」は「失敗してもあきらめずに、もう一度挑戦する」や「やり始めたことは最後までやり通す」という項目から分かるように、「課題を遂行する際に困難があっても取り組みを途中で投げ出さないようにしようとしている」という個人の構えの傾向の強さを測定している因子である」と言及している。また、「積極的活動性」は「新しい友達や先生に積極的に話しかけることができる」や「新しい行事や仕事にすぐなれる方だ」という項目から分かるように、「課題に向かっていく際に抵抗なく行動を始めることができる」というこれまでの自分自身の行動の傾向を、個人がどう評価しているか測定している因子であると推測している。

これら２つの因子の特徴から、田中は、「挑戦性」は失敗や困難を想定しているが、「積極的活動性」には失敗や困難の想定はなく、失敗や困難の想定なしに物事に取り組むことができる傾向は生活経験の少ない小学生であるからこそ見出せる特質であると考察している⁴⁾。

「なすかしの森タイム」での参加児童と教育支援スタッフ同士の話し合いには基本的には「失敗」という概念がない。これは、参加児童と直接接する教育支援スタッフへ参加児童を尊重する言葉掛けを行うよう事前指導等を行っており、何か間違ったことをしてしまった時なども「否定」ではなく寄り添いながら共に考えるというスタンスを取って、参加児童の主体性を尊重しているためである。

以上のことによって、「積極的活動性」に特に有意差が出たことは偶然ではないことが伺える。

３．セカンドスクールの指導モデルについて

今回の調査では、特に「なすかしの森タイム」において、参加児童の変容が大きいことが明らかとなった。参与観察で示されたいくつかの例から、参加児童の有意な変容に効果の期待できる指導モデルを図３に示す。

「なすかしの森タイム」における参加児童への声掛けや関わりは主に教育支援スタッフが行っており、その指導を行う上で「教員の不在」、「児童の自主性」、「心身の安全」という3点の特筆すべき留意点を抽出した。

(1) 教員の不在

学校生活では、教員は参加児童に常に寄り添って指導する立場であるが、「なすかしの森タイム」では、教員が参加児童から距離を取って、参加児童の間違いを温かく見守り続ける立場となる。このことにより、現場の混乱や予期せぬ結論に至ってしまう恐れはあるが、「なすかしの森タイム」では、自分たちでプログラムを計画しなくてはならないため、困難な状況に対応する力が身に付く可能性が大きい。

(2) 児童の自主性

学習指導要領は、「教師の適切な指導の下に、児童の自発的、自治的な活動が効果的に展開されるようにする」⁽⁵⁾ことが求められていると示している。参与観察の事例(1)では、教育支援スタッフから自主性を尊重するための声掛けを実施したことにより、Eさんの成長を促したと考えられる。このことから、個人およびグループの成長にとって自主性が尊重されることが重要であると言える。

(3) 心身の安全

参与観察の事例(2)で示したように、話し合いの途中で「泣き出してしまう児童」や「言い争いになる児童」がおり、状況によって、該当児童はもちろん、その後の学級運営に悪い影響を及ぼす可能性がある。また、ナイトハイクなどの活動においては怪我や事故につながる場合も考えられる。

これらの3つの留意点を踏まえた上で参加児童への指導を行う必要があるが、セカンドスクールの目的である「仲間と助け合って生活する喜びを味わってもらうこと」を重視し、参加児童のやる気を引き出すために、教育支援スタッフは寄り添いや声掛け、励ましをすることが大切である。ただし、教育支援スタッフは主に大学生であり、生徒指導等の経験があまり多くはないため、介入の程度については自然の家の職員が見極め、支援スタッフへの助言とケアを行っていく必要があると考えられる。

VII. 結論

1. 本稿の結果

本稿では、セカンドスクールにおいて田中が開発した小学生版レジリエンス尺度を用いて参加児童のレジリエンスの変容を明らかにし、この結果をもとに、セカンドスクールの指導モデルを作成することにある。その結果は以下の通りである。

- ①質問紙調査によって、参加児童の pre-post 間を比較した結果、すべての因子において有意な差が確認された。したがって、セカンドスクールが参加児童に有意な影響を及ぼすことが確認された。
- ②小学生版のレジリエンス尺度の4つの因子の中でも「積極的活動性」において特に表れており、これは失敗を恐れずに何事にも挑戦することができる小学生の特質だと考えられる。

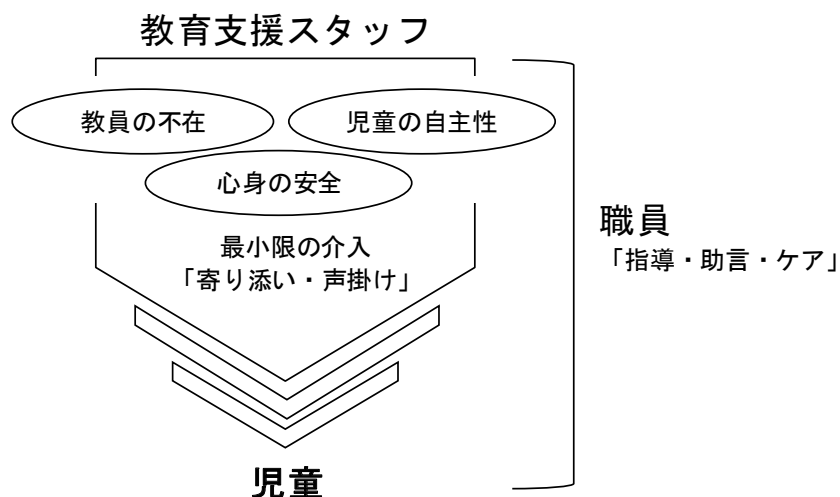


図3 セカンドスクールの指導モデル

③①、②をもとにセカンドスクールの指導モデルを作成した。「教員の不在」「児童の自主性」「心身の安全」を念頭に置いた上で参加児童への指導は、参加児童の隠れた意思ややる気を汲み取り、参加児童の気持ちに寄り添う声掛けや、励ましが大切であると考えられる。

2. 今後の課題

本研究において、参加児童の変容を明らかにし、指導モデルを作成した結果、参加児童への指導は「教員の不在」「児童の自主性」「心身の安全」の3点を念頭に置き、参加児童の隠れた意思ややる気を汲み取り、参加児童の気持ちに寄り添う声掛けや、励ましが大切であることが分かった。しかし、この指導の考え方やスタンスの見極めは難しく、指導者自身も学び続けていかなければならず、そのための方法を学び続けていく必要がある。

諸言でも述べている通り、セカンドスクールは歴史ある教育事業である。またその必要性は年々参加校が増えていることから明らかである。今後のセカンドスクールにおいて、指導モデルを取り入れることにより、更なる可能性を検証していきたい。

引用文献、参考文献、注

- 1) 原郁水、都築繁幸「小学校5年生のレジリエンス育成プログラムの試行的研究」『障害者教育・福祉学研究』第10巻、2014、pp. 85
- 2) 原郁水、都築繁幸「保険教育への応用を目指したレジリエンス育成プログラムに関する文献的考察」『教科開発学論集』第1号、2013、pp. 231
- 3) 田中文夫「小学生のレジリエンスに関する研究：尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」、2012、pp. 7-10
- 4) 田中文夫「小学生のレジリエンスに関する研究：尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」、2012、pp. 28
- 5) 小学校学習指導要領、第6章特別活動、2008